

### 【研修先】

石川県輪島市「輪島土蔵文化委員会」

### 【研修テーマ】

古き良き土蔵を修復する

### 【研修先選定の動機】

春学期に、水野先生の講義「都市住宅政策論」、オムニバス形式の「まちづくりの思想」を通して輪島土蔵（伝統的な建築方法。外壁に漆や土壁を使うのが特徴で、倉庫、住居、輪島塗の制作場所としてなど、幅広く活用されている）のことを知った。能登半島地震（2007.3）で損壊した土蔵は、他の建物と違い、修復の補助金が支給されなかったため、現状は当時のまま、もしくは取り壊しが行われている。そこで、水野先生が理事長を務める「輪島土蔵文化研究会」は、市民が中心となり、「手探りで楽しんで」修復活動に取り組んでいる。講義に取り上げられたVTRでは、金沢の大学に通う建築学部生や左官職人さん（土壁を塗る職人さん）が和気あいあいと参加する姿が取り上げられており、自分も参加したいと思った。泥だらけになりながら活動する人々の姿を目にして、私も実際にこの目で見て、この手で土に触れてみたいと思ったのだ。

一方、輪島土蔵の他に、金沢町屋も取り壊しが依然として続いている。昔ながらの建築法が地震に弱いと認識されているが、その説は誤解であると講義で知った。そのなかで、どちらも古き良き街並み、つまりこの地域特有の景観を構成する大切な要素であり、これからも保持していくべきだと私は強く感じた。近年リノベーションされ、カフェ、寮、ギャラリーなどに生まれ変わった町屋を見学し、これから学部で「まちづくり」を学んでいく上での後学のためにも、国内研修制度を活用し、見に行こうと考えた。

### 【研修内容】

- ・土蔵修復活動
- ・河井町と鳳至町のキリコ祭に参加
- ・町屋巡遊

### 【研修スケジュール】

- 1日目 午前：土蔵修復  
午後：土蔵修復、河井町のキリコ祭の見学
- 2日目 午前：土蔵修復  
午後：土蔵修復、鳳至町のキリコ祭に参加
- 3日目 午前：修復メンバー解散、金沢へ移動  
午後：町屋巡遊

\*以下、現地での生活に移る。

### 【土蔵修復活動】

今回の活動には、左官職人さん、金沢工業大学の学生、石川テレビの方、近隣住民の方々、水野先生、先生の知人の方々、法政大学生2名等が参加した。今回修復する土蔵は、前回の活動から数か月期間が空いていたため、まずは清掃から開始した。祖母の家と似た急な階段を登ると、左にある部屋には沢山の布団、右の部屋はまるで吹き抜けのように、床が半分なかった。畳と畳の真っ暗な隙間、スイッチを押しても付かない電灯（そもそも電気が通っていない）、ぼろぼろの壁を見て、そうか、これから私たちが修復するんだ、とやっとな実感は沸いたのと同時に、もしかしてここに今夜寝るの？と驚きを隠せなかった。他大生はいつもの参加メンバーらしく、慣れた様子で2階の窓から屋根に登り、平然とその屋根に布団を平干ししてゆく。それを目の当たりにし、圧倒されたが、郷に入っては郷に従えだ、と自分を奮い立たすことが出来た。その後、不要なものを片付け、道具を運び、後から到着する予定であった左官職人さんを待った。合流してからは、壁に塗るための石灰が大きなバケツの中で固まっていた為、スコップで解し、専用の機械に入れて、どろどろに耕したが、かなりの重労働で炎天下の中汗が噴き出した。作業がひと段落すると、次は米を炊く竈の艶出しのためにひたすらに軍手で磨く作業だ。その窯は今回も参加している工業大生のプロジェクトとして設計から手掛けたものらしく、特殊で近未来的な形状をしていた。彼らは法政大学でいうゼミの代わりにプロジェクトチームがあり、この修復活動にはそのメンバーで参加したらしい。自分の友人は法政と似たような大学に通う人が多いため、彼らの話は私にとって大変刺激的であった。

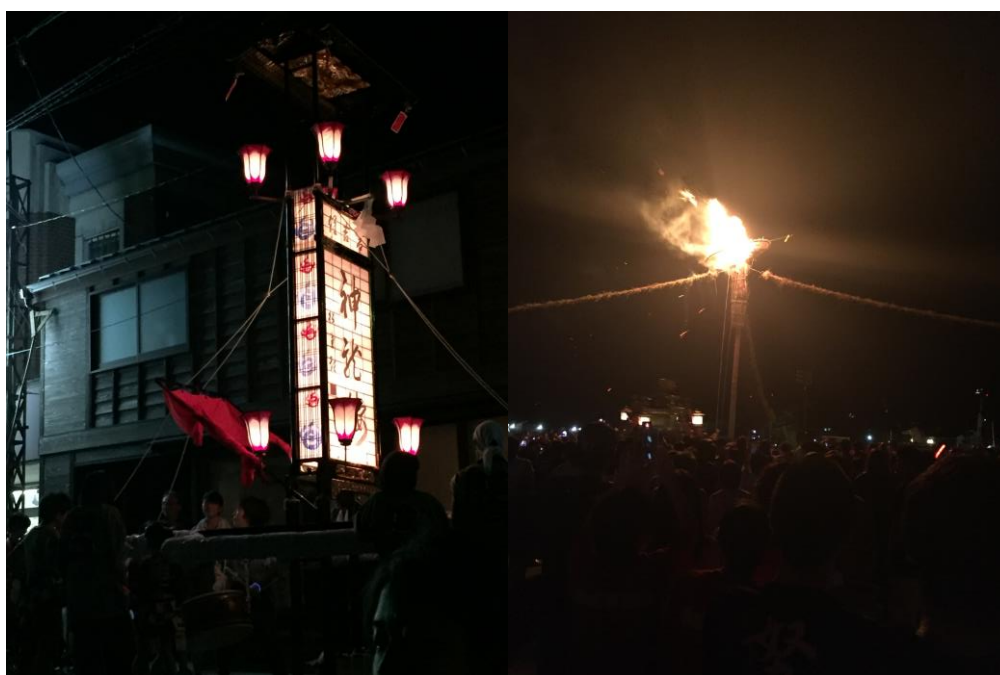
2日目は、幸運なことに、左官職人さんに壁を塗らせてもらえた。壁の、薄いコーティングされた部分を叩いて剥がし、そこに塗っていく...これは下地を塗る大切な作業であった。職人さんを見ているときは、「私にもちょっとは出来るかな？」なんて思っていたけど、実際は壁に土をつけることさえ一苦勞で、何回もべちゅっと落としてしまった。難しいことを、こともなげに見せることは、職人さんの技の一つかもしれない。その作業を進めるなか、初めて見る職人技に、私は、「絶対に絶やしてはならない、大和魂」を強く感じた。

### 【キリコ祭】

夜になると、修復メンバーで河井町の祭りを見に行った。キリコ祭りは能登半島広域で7月から9月にかけて催される一大イベントだ。上京した人々は皆この時期に帰省すると言われる程、祭りを愛している。その中で、輪島大祭は毎年8月22日から25日の4日間、4エリア、4つの神社合同で行われる。私たちは翌日の鳳至町キリコ祭りに参加するため、初日は河井町の出店を見て歩いたり、大松明神事を見た。大松明神事とは、高さ20メートルの巨大松明に竹が3本刺さっており、燃え盛る松明のふもとを、厄年の男らが神輿を担ぎ、火の粉を被りながらぐるぐると回る。ついに松明が落下すると、男性が火の中地区対

抗で竹を取りにいく行事だ。会場に救急車・消防車が張り込む様子からして、過酷さが身に染みて分かる。祭りのフィナーレを飾るこの神事は、圧巻であった。

2日目はいよいよ参加する番だ。大松明神事の会場に行くまで数時間、キリコ（四角い灯籠。高さ5-6メートルにも及ぶ）を10数人で担ぎ、時に大回転し、時に全力で走った。和太鼓の囃子、透き通る笛、にぎやかな鉦（かね）、朗らかな歌声を響かせ、町内を練り歩く。お世話になっているお店の前に到着すると、和太鼓の力強いパフォーマンスを披露して、手土産をいただき、次のお店まで歌に合わせグッと、キリコを天高く持ち上げる。道行く人は色とりどりの法被を、女子高校生はさらしを巻いて、町全体がはしゃいでいた。これこそが祭りで、この賑わいを守ること、取り戻すことが「まちづくり」だと感じた。



#### 【最終日】

私と宮澤は水野先生と共に輪島を出発した。金沢町屋に向かう途中、授業で取り上げられた、大野の醤油蔵に立ち寄った。車から降りると町全体から香り立つ醤油の豊かなにおいに、そして町屋同様にリノベーションされた醤油蔵に出迎えられた。歴史的な外装とは対照的に、屋内ではスタイリッシュに瓶詰めされたバラエティ溢れる醤油が販売されている等、温故知新な様子がとても魅力的であった。蔵をそれぞれ見て回りやすいように、地域の子とアーティストが共に作った案内板も忘れずにチェックした。

続いて、町屋巡遊に出かけた。主要な茶屋街は、「ひがし茶屋街」「西茶屋街」「主計町（かずえまち）茶屋街」があり、ひがし茶屋街は観光客に大変人気である為、他2つを中心に見て回った。閑静な茶屋街を歩くうちに、家屋から風流な音楽が聞こえる一町屋は昔から、芸者さんの稽古場としての役割もあるそうだ。歩いていくうちに、机上で学んだ際の、「どこか遠い所で、なんだか素敵なまちづくりが行われているらしい」という感覚から、現実

味が沸き、それだけでもこの研修は意味あるものとなった、と感じた。



#### 【まとめ】

この研修を通じて、私はより一層金沢、そして能登の素晴らしさを知った。それと同時に、いくつかの問題点も発見した。1つは、未だ知名度が低いことである。輪島に住む人の言葉で印象的であったのは、「こんなに輪島は頑張ってるのに、あんまり知られてない。多分宣伝が足りてない、というか、、、結局はシャイなんだろうな」というものだ。確かに、私は授業で習うまで何もかも知らなかった。だが今では、伝統的な街並み、それに融合する近代的な取り組み、そして情熱的な人々に、すっかりファンになっている。つまり、知れば虜になってしまうような魅力を、この地域は持っている。この問題を解決するためには、より一層宣伝に力を入れていくことが大切だと気づいた。その中で私が出来ることは、来年も、再来年も法政大学生がこの地に国内研修に行く流れを作ることだと思う。それに向けて、今後、取り組んでいきたい。